

こまちインタビュー



「にぎわい」は地域がバランスよく成長するために必要なものと言われています。地域における「にぎわい」の創出を語るのに欠かせないのが「イベントへの取り組み」。そこで、『相模大野アートクラフト市』の運営責任者である藤川智さんにお話をうかがいました。長く続けてこられたクラフト市の歩みと成果「これから」について語っていただきました。(以下お話は GreenStudio の代表・藤川さん)



初期のパフレット▶
様々な形態を試しています。

二十歳を迎えた はたち 相模大野アートクラフト市 ～みんなで考えたい“にぎわい”の果たす役割～

2025年春の市のコリドー会場にて
左下隅が藤川さん▶

もんじょとクラフト市は兄弟イベント

こんにちは。「春の市／秋の市」年2回のクラフト市をやらせていただいています。ご存知の「もんじょ祭り」とは同じ会議から生まれた兄弟で、再開発が進む駅周辺の活性化を市民自身の手でやろうという企画が土台になっています。店主以外にもさまざまな人が集まって、2年がかりで会議をまとめたのが2004年頃のことでした。私も「この手でまちに魂を入れよう」といった気持ちで関わっていました。

たくさんの人の想いが形になり、そして成果はあった？

こうして生まれたのがクラフト市です。会議では「敷居の低いアートイベント」や「商店が主催者だから販売系がいい」「相模大野をアートのまちに」など、みんなのアイデアで少しずつ肉付けが進み、ワクワクするような青写真がでてきました。

イベントの準備を通して普段交流のない者同士がだんだんと「知り合い」になり、気心の知れた「仲間」となるのは、「何人集客できた」ということ以上に大切。それこそが地域イベントの醍醐味です。まちづくりは行政がやるものなどと思わず、自ら参画しようと行動した先にあるのが私たちの「理想のまち」だと思うのです。

アートの種まきをすることによって理想を見出そうとしたわけですが、それだけで成果が得られたのかといえば、そんなに簡単ではなかったです。

たった20年ですから。やはりもっと多くのムーヴが歩み出てくる

ことで初めて進展するのでしょうか。アートクラフト市の成果について強いて挙げれば「相模大野もたくさんの集客ができる」というポテンシャルみたいなものが示せたところではないかと

思っています。

これからの相模大野に必要なもの

クラフト市は有志が集まって話し合いながら作っている純粋な「市民の手づくり」という点が素晴らしいです。規模の大小とは関係なく仲間を募って何かにトライすることはなかなか面白いことです。生活にメリハリをもたらし、改めて生きがいや目標を考える機会にもなるのじゃないでしょうか。

クラフト市は今年の秋に35回目を迎えました。1回目が2005年のことでしたのでちょうど20年になります。市民の手づくりという形は1回目から変わっていません。それなりに長い年月でしたが、このイベントをきっかけにしてさらに大きな「仲間の輪」が育つと良いですね。来年には、旧伊勢丹の跡地再開発が終わり、駅前に新たなフィールドがオープンします。クラフト市もそろそろ今の形を見直して、新しくなっていくまちの姿に見合うものに変わりたいと考えています。①さらに長く続けられるように ②みんなが参画しやすいように ③新しい担い手が引き継いでくれるように ④地域の人たちから知ってもらえるように そして、⑤みんなが喜んでくれるように。こんなふうに舵を切り直そうとしています。

自分でも何かしてみようという人がもっとたくさん関わりを持ってくれると嬉しいです。

“にぎわい”なのか“人ごみ”なのか… みんなの可能性を秘めつつ…

今はまだ地域からの評価も想像以上に低く、たくさんの人を喜ばせる場を作ったとしても喜んでくれる人ばかりとは限りません。そうしたことも反省点にして、今後は例えば作品を楽しみながらまちをピクニックのように巡る工夫とか、いろんなアイデアが出てきています。

相模大野の良さをみんなで味わい、みんなで何かを言い合える取組みの場にクラフト市もなりたいですね。



相模大野の「にぎわい」をアピール
実行委員の名刺

自分をこぎやかしてみる このまちかどで

相模大野駅周辺のクリスマス・イルミネーション(撮影 2025年11月23日)



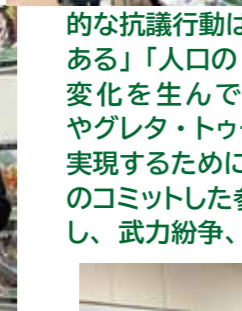
2025年10月30日(金)
@南区地域福祉交流ラウンジ

ココdeコミ 開催報告
ひらきましたの報告

ココdeコミュニケーションしましょ

**まことに生きる
自分らしく生きる**

こごずたん24号の一面で
登場いただいた森多可示さん
お話しただいて、言葉を共有
することから始めました。



▲ページ内四角形の写真は
すべてココdeコミの様子

市民的発意と活動を語り始めるとき、言葉の検証から始めてみましょう。ひとつひとつの言葉の意味を尋ねることで隠れている思いが顔を出してくる気がしてきます。

活動の場としての**地域**は、具体的な場所をイメージできる地区より広く、共同してくらししていく地理的範囲で、ある程度の価値観と均質性を感じられ、互いの共通性や相互関係が在るところと言えます。そんな地域が集まって人びとの関係のまとまりが輪郭をもって総体となったものを**社会**としたいところですが、自然発生的につくられて、利害・目的で括りもち「世の中」「世間」という囲みで現れてきて、しばしば「生きづらさ」を持ち込んできます。そこで活動する主体は**個人**という個々別々の単一の個人というよりは、市の住民、都市の構成員である**市民**として政治に関与して広く公共空間の、あるいは地域の形成に自律的に自発的に参加をしてということになります。

そして、**活動**はさまざまな呼び名、地区活動、地域活動、個人活動、**市民活動**と呼ばれます。広辞苑第7版に掲載されているのは、「市民活動」だけで、「ボランティアやNPOでの活動など社会的で公益的な活動」のことと解説されています。そんなふうに言葉を整理して、**活動**と**運動**の違いを押さえておきたいです。いきいきと積極的にはたらき動くのを**市民活動**と呼ぶわけですが、そこに自主的な発意を加えて**市民運動**へと自分を開いていくことを考えたいと思うのです。さらに一步「公共」の形成に向け、自主・自律的で横断的に運動し、いわば「生きづらさ」を越える「自分らしく生きること」への模索です。

発意するとき
いちばんに
大切なことそれは
相手への**リスペクト**

誰かのためでなく
自分のために**発意する**

- 森多可示さんの
参考図書
- 佐久間裕美子・著 **Weの市民革命** (朝日出版社)
 - 佐久間裕美子・著 **小さな革命のすすめ** (偕成社)
 - 堂目卓生・山崎吾郎・編 **やっかいな問題はみんなで解く** (世界思想社)

*「3.5%」や「コレクティブ・インパクト」などに
さらっとふれている3冊です。

10月30日相模大野にて、ここでずっとくらしたいこうと思ってるひとたちの出会いの場として地域カフェを開催させていただきました。「ここでコミュニケーションしましょ!」を略して(ここ de コミ)。古くから本紙をお読みくださっておいでの方は、「ずいぶん久しぶりにカフェをひらいたんだなあ」と思われたのではないのでしょうか。本紙バックナンバーを繰っていただくと、第8号にて「円卓の騎士」ならぬ「円卓の市民」となって語り合う(円卓ミーティング)開催の報告を読むことができます。10年ぶりのカフェ、驚くほど使っている言葉は似ていますが、「まちづくり」に身を置いて、まちもときも、また、自分もすこ〜し萌しているのかもしれない。すがたはなかなかみえないけれど。ということで、紙上にてご報告をさせていただきます。それこそ、共感の3.5%を求めて。

3.5%の人に共感してもらえれば 何かが変わるか?!

「**3.5%ルール**」というのをご存知ですか? ハーバード大学の政治学者、エリカ・チェノウェスが提唱した法則です。チェノウェスは、過去の社会変革運動を分析した結果、非暴力運動の成功率が暴力運動の成功率を上回ることを導き出し、以下の仮説を導きました。「非暴力的な抗議行動は、武力紛争の2倍の確率で成功する可能性がある」「人口の3.5%以上が関与する抗議行動は必ず何らかの変化を生んでいる」。具体的には「Black Lives Matter」やグレタ・トゥーンベリさんの活動です。大規模な社会変革を実現するためには、必ずしも過半数の賛成は必要なく、一定数のコミットした参加者が重要であるということを示唆していますし、武力紛争、戦争でなくとも社会は変革できるとも。

もちろん、3.5%の人が動けば必ず変革できると思うのは早計でしょう。100人いれば4人の共感を得られればよい、というのと、日本国民全体の3.5%、435万人の支持を得られなければならない、というのとレベルが違います。逆に、だからこそ、自治体や国家のレベルで考えると、3.5%の支持・共感というのは説得力があります。政党支持率でも3%を越えれば無党派支持の拡大にもつながる傾向があると思います。仮説にはさまざまな批判もありますが、せめて3.5%の人に共感してもらうにはどうするか。または、3.5%のなかに入るかどうかを決めると考えれば、ハードルが下がる気がします。

**何かをやるぞとだれかが旗をかけたなら
その気持ちを大事することから始めよう**

コレクティブ・インパクトを知ろう



企業、行政、NPO、市民など多様な組織や人々がそれぞれの分野を超えて協力し、共通の社会課題解決を目指すアプローチのこと。言わば、異業種交流・連携みたいなことを想像してみてください。

複数の主体がそれぞれの強みやノウハウを持ち寄り、大規模な社会変革を生み出すことを目的としている、これからの新しいつながりかたと試み。そして、コレクティブ・インパクトはアップデートされて「**3.0**」の段階に進んでいます。従来の枠組みに、参加者間の信頼醸成や対話の促進となる学習を加え、変革を促す信頼関係=「環境づくり」の重要性が指摘されています。

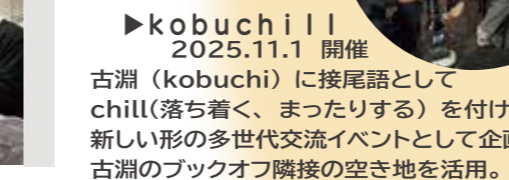
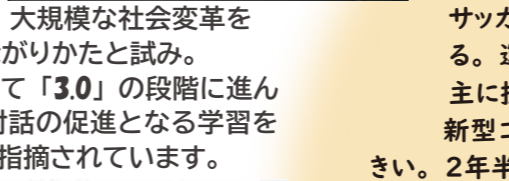
コレクティブ・インパクトを成功させるための条件

- 1 共通のアジェンダ(共通の目標)→ 解決すべき社会課題に対するビジョンの共有
- 2 共有された評価システム → 成果を測定・報告し、参加者間で共有することで学習と改善が促進
- 3 相互に活動を補強する(相互強化の取り組み)→ 各参加者がそれぞれの強みを活かし、互いの活動を補完し合う。
- 4 継続的でオープンなコミュニケーション
- 5 バックボーン支援組織 → 資金、戦略、関係機関との調整・支援などを行う組織

コレクティブ・インパクトのアップデート

コレクティブ・インパクト3.0

- マネジメントからムーブメントづくりへのシフト
- 1 コミュニティの願い
 - 2 戦略的な学習
 - 3 効果が最大になる活動の組み合わせ
 - 4 すべての関係者の参画
 - 5 変革プロセスを支える環境・仕組み



弱冠24歳の青年・有山 蒔恩さんは、すでにして自らの物語と明確な主義を持っていた。主義とは、「飛躍する意欲」への圧倒的な肯定である。

相模原生まれの相模原育ち、地元サッカークラブ出身の彼は、地域で試合したりお祭りに参加したりする機会が多く、地元の盛り上げようとする大人たちを多く見てきたこともあって、地域、地元で何かやりたいと思ってきた。同級生にサッカーチームをつくらうと誘われて応じる。運営の裏方、地域と関わる部分を主に担当することになった。

新型コロナ禍に大学生になったことも大きい。2年半も大学に行けず、出会いも経験も得られない。まわりを見渡しても、やりたいことがない、就職したくない、とか、何より将来へのワクワク感が持てない。そもそもこの社会はコロナ禍からどう復活できるのか考えないではいられなかった。

大学生の秘密基地にしたい

地域にこだわる彼が目につけたのは空き家問題。空き家をリノベーションして拠点とすれば、大学を越えたもっと大きなコミュニティで人が集い、「飛躍」する機会を提供できるのではないか。そんなことをたまたま〈FMさがみ〉で語ったところ、古淵に借家を持つ大家さんが名乗り出てくれた。名付けて〈ヒヤクキチ〉。有山さん、大学2年生の11月。

今回の地域カフェでしばし話題になったのが
空き家を利用して活動しているという
ウワサの大学生たちのこと。
早速のぞきに行ってみました——

HIYAKUKICHI は文字通り飛躍するための拠点だった!

Produced by Saltista Hashimoto FC
相模原市南区西大沼 1-5-31
(JR相模原古淵駅より徒歩7分)
<https://hiyakukichi.saltista.com/>

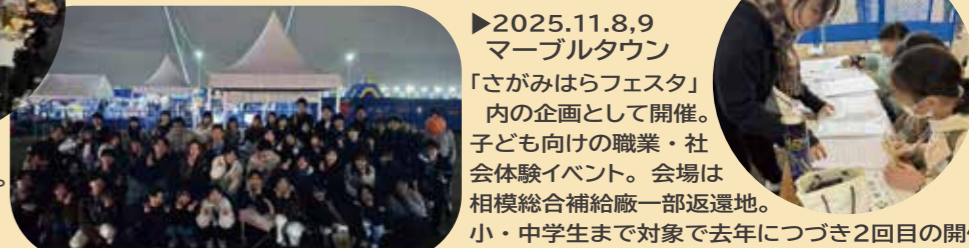
HIYAKUKITIIにて 有山蒔恩さん
株式会社サルティスタ橋本 代表取締役
一般社団法人ヒヤクLABO 代表理事

サッカーチーム、空き家事業を運営する〈株式会社サルティスタ橋本〉を登記するのは翌年9月。「サルティスタ」とはスペイン語で「飛躍主義、飛躍する者たち」といった意味で、「飛躍」を目指し「飛躍」する機会を提供することを理念として掲げる。だから〈ヒヤクキチ〉も①土台となる地域の居場所であり、②子どもたちが体験を得てチャレンジしていく経験を重ねられること、③何よりも運営する主体のひとりひとりが成長を遂げ、「飛躍」できること。大学を卒業した有山さんは、今年6月には〈一般社団法人ヒヤク LABO〉の代表理事となった。現在、27名の大学生ひとりひとりが発意する「飛躍」とともにある。

君の行く道はヒヤクへとつづく
彼がこだわる「飛躍」とは、自身の伸びしろを増やすことだと語る。能力的に成長し、思考の幅を拡げ、対人関係においても関係性を深めていく能力をたくわえていくこと。いわゆる「well-being」な状態(単に健康というだけでなく、身体的・精神的・社会的に良好で満たされる)において「飛躍したい」と。

若き経営者として JC 及び相模原 YEG の会員となって、事業連携、地域就業の窓口も求めつつ「飛躍」を求める姿勢には、新しい形の社会参加の価値観が窺える。彼が彼の物語を語っていると思う所以である。

**2025年11月にヒヤクの若者が取組んだイベント
kobuchill (コブチル) とマープルタウン**



▶2025.11.8,9
マープルタウン
「さがみはらフェスタ」内の企画として開催。子ども向けの職業・社会体験イベント。会場は相模原総合補給廠一部返還地。小・中学生まで対象で去年につづき2回目の開催。

▶kobuchill
2025.11.1 開催
古淵(kobuchi)に接尾語としてchill(落ち着く、まったりする)を付けた。新しい形の多世代交流イベントとして企画。古淵のブックオフ隣接の空き地を活用。

お待ちいただき
ありがとうございました

映画に出てくる難波さんの月餅つくりのシーンがとても面白そうだったから。そんなワークショップができないかな…そう思ったひとりの発意から生まれた企画です。

『こころの通訳者たち』上映から 『こころ』の月餅つくり教室へ

ユニバーサルデザインの教室をめざして

日時●2026年2月8日(日)

午前の部 10:00～『こころの通訳者たち』上映会

午後の部 1:30～『こころ』の月餅つくり教室

参加費●各部 おひとり **999円** 定員●45名まで

※午前の部、午後の部どちらかのみ参加も可。

※午後の部の参加費には材料費が含まれています。

※午前・午後両方を参加される場合999円×2部となります。

会場●ユニコムプラザ **さがみはら 実習室1**

なんば そうた

講師とお話●**難波 創太さん**

1968年生まれ。3DCG デザイナーだった39歳のときに事故で失明、全盲となる。三軒茶屋で鍼灸・マッサージ・薬膳のプライベートサロン〈ボディケア・キッチン るくぜん〉を経営。『こころの通訳者たち』の作品中では、音声ガイド制作のモニターとなっている様子が撮影されている。

月餅つくり教室では、焼き上がり時間を利用して、難波さんに撮影エピソードから普段感じていること、考えていることを語っていただきます。

お申込みと問合せ●NPO法人ここずっと ☎090-1603-0686 (田嶋)

■ 2025年の締めくくり

〈ここdeシネマ第24回〉は『**福田村事件**』

12月19日(金) 14:00～18:30～

参加費1000円 18歳以下・介護者無料 @相模原南市民ホール

たとえ100年が101年になって102年になって103年になってもこのまちのひとたちと刻んでおきたい記憶だから。ともに生きていくひとと年の瀬にこの映画を観よう。



©「福田村事件」プロジェクト2023

■ お店やイベントなどをユニバーサルデザインにするお手伝いします。

- ・音声コード・字幕・音声ガイド・道や会場案内など相談対応。
- ・NPO法人ここずっとは2024年4月より、相模原市との市民協働事業「UD普及・啓発事業」に取り組んでいます。
- ・「UDさがみはら」を相模原市と協働で発行しています。バックナンバーの欲しい方は、どうぞ、ご連絡ください。

■ NPO法人ここずっとは市民相談窓口を開いています。相談は☎042-851-5646へ。

こころの通訳者たち

What a Wonderful World

音を見えるように
光が聴こえるように

2021年/監督・山田礼次
94分/キネマコンコー/Chupki



市民講座ブックレットを
発行しました

いま **PFAS** 有機フッ素化合物 を知って
いのちを守ろう!

牛山元美 著
NPO法人ここずっと 発行

2025年6月14日、大野南地区自治会連合会とNPO法人ここずっとの共催「市民講座 PFASを知ろう!」が大野南公民館にて行われました。現在進行形で進むPFAS汚染は私たちの暮らしにとっても大事な知識です。そこで、当日使用のスライドと牛山先生のお話をブックレットにまとめました。PFAS問題の理解にお役立てください。頒価1冊500円です。お求めは、下記まで。
※PFAS情報は日々更新されており、発行日現在の情報によっていることをご承知おきください。

『フリー情報紙 **ここずたうん**』 No.27

[発行日] 2025年12月 [発行者] NPO法人ここずっと



〒252-0303 南区相模大野9-6-18
ここずたうん編集室

ご意見、投稿、記者志望者は
ここずたうん編集室へ

【TEL】042-851-5646 【FAX】042-742-0447

【E-mail】info@cocozutto.jp

※ここずたうんはまちづくりを考える【NPO法人ここずっと】が発行しています。